

## 【最優秀賞】

### 30周年記念かるた制作

～この里で皆と共に暮らした証～

神戸〈ゆうゆうの里〉生活サービス課 事務管理課  
○彌久末健太郎 三枝和美

#### 【目的】

コミュニティサービスでは体力的、身体的に外出が難しい方に里内での集いの場を提供したいと考えていた。また、募集では新入居者が早く里に馴染んでいただく為のソフトランディングに試行錯誤していた。この共通した問題を二つの課が協力し、たくさんの方に参加していただける企画を考え、活気ある里にしていきたいということ、又30周年の記念すべき年に、この里で皆と共に暮らした証を残したいという思いを形にできないかということ、この二つのことを目的に、入居者と共に作る「30周年記念ゆうゆうかるた」制作を提案した。

#### 【方法】

仮説：入居者全員に里での暮らしについて句を募集することにより、参加意識が高まり、又投稿された句を元にかるたを手作りすることで、仲間意識が生まれ、完成すれば一緒に達成感・喜びを感じることができるのではないかと考えた。

対象：入居者

方法：句の募集・・・施設内新聞「まど」と掲示板でご入居者に呼び掛ける

かるた制作・・・自分のできる作業で自由に参加していただく

かるた展示・・・ゆうゆう祭りに併せて、施設内に原画の展示を行う

かるた大会開催・・・里の行事として新年にかるた大会を行う

以上の過程で、入居者の様子を観察し、又アンケートで意識調査を行う

期間：2012年12月1日～2013年11月23日現在進行中。

倫理的配慮：完成したかるたを公表すること、制作風景の写真を研究発表で使用することを同意書により了解を得た。

#### 【結果】

句の募集については、当初の予想をはるかに上回る、人数にして150名以上609首の句の投稿があり、早い段階から制作に取りかかることができた。

絵を描く人・字を書く人・糊づけする人など、積極的に自分の得意な作業を見つけ、楽しんで参加してもらうことができた。

協力者51名・延べ参加人数300名以上

#### 【考察】

入居者自身が色々な工夫・アイデアを出し合い、エンパワメント（個の持つ潜在能力）を引き出すことに成功した。参加者からはこのような里内でのレクリエーション活動を引き続き行いたいという意見がアンケートより多数寄せられた。

#### 【結論】

今回初めて、職員と入居者が一緒になり一つのものを作り上げていく過程の中で知らない方同士でも、楽しく和気あいあいと一緒に過ごすことができ、部屋から外に出て新しい友達が出来ると、生き生きとした生活が送れる事が出来た。又、一つのを一緒に完成させた喜びを味わうことができた。今後このような活動を提案していきたい。

## 【優秀賞】

### 認知症の方を笑顔で支える地域づくり

～ 施設内にキャラバンメイトの窓口を設置 ～

伊豆高原〈ゆうゆうの里〉キャラバンメイト連絡会

○藤原裕美 里吉恵子 工藤由香利 齋藤るみ

斉藤恵子 笹渡幸江 丸山野孝美

#### 【目的】

入居者が認知症になってもその人らしく安心して暮らせるようにするためには、まわりの人達の理解と支援が必要である。そのためには介護職員だけでなく、〈ゆうゆうの里〉に勤める全ての職員が認知症に対する基礎的な知識を身につけられるよう、平成 21 年度より認知症サポーター養成講座を開催している。次の段階として、入居者や地域住民にも理解を得たいと考え、平成 24 年度に認知症サポーター養成公開講座を開催した。参加者のアンケートに「忘れてしまうので何回か開催してほしい。出来るだけ多くの人達が理解することで、認知症の方も穏やかに過ごせると思う」との意見があった。また、伊東市の認知症理解普及支援員から「〈ゆうゆうの里〉は組織全体で協力してくれている」と言われたこともあり、個人で活動していたキャラバンメイトの資格を持つ職員から「〈ゆうゆうの里〉で窓口を設置して組織で活動したい」との声が挙がった。そこで、施設内にキャラバンメイト連絡会を設置し、地域での活動範囲を広げていくことによって、入居者が認知症になっても安心して暮らすことのできる地域づくりを目指すこととした。

#### 【方法】

##### (1) 内容

- ① 施設内に「伊豆高原〈ゆうゆうの里〉キャラバンメイト連絡会」を設置する。
- ② 依頼された講座を円滑に進められるように、連絡会を定期的を開催する。

##### (2) 倫理的配慮

アンケートで収集した個人情報に関しては、適切にデータの管理をおこない、個人が特定できないように配慮した。また、写真の使用については対象者の同意をいただいた。

#### 【結果】

連絡会を設置したことにより、対象者を広げ、講座をスムーズに開催することができた。地域の小学校で講座を行った際、校長先生から「福祉体験学習の前に講座を聞くことにより、認知症という病気を知っているのと知らないのでは、子供達のお年寄りに接する態度が全然違う」との言葉をいただいた。また、協力医療機関である歯科医院で行った講座では「講座を受けるまでサポーターの事は知らなかった。このような活動が行なわれていることが更に世の中に広まればよいと思った」とアンケートに書かれていた。

#### 【考察】

講座を開催したことにより、認知症に対する理解を深めることができた。

#### 【結論】

今後も一人でも多くの認知症サポーターを増やし、認知症になっても入居者が地域の中安心して暮らせるように、笑顔で支える地域づくりをサポートしていきたい。

## 【優秀賞】

# オールラウンドの職員を目指して

～職員が協力し合える体制づくり～

神戸（ゆうゆうの里）事務管理課

○和田敏英 橋本敬子 愛甲祥子 嘉崎真理

### 【目的】

事務管理課の中の「総務経理」は、大きく分けて総務業務と経理業務で構成された部署である。主に総務業務は職員給与・パート給与、経理業務は管理費請求・業者支払・予算実績管理に大きく分類されている。少人数で構成された部署であるため、これらの業務一つひとつを各職員が個別に担当する事となり、結果的には職員同士の協力が取れずに、個人の負担が大きくなりやすい傾向があった。そのため何か不測の事態が発生した場合、「総務経理」全体が立ち行かなくなる不安とプレッシャーが隣り合わせにあった。そこで、各職員が総務業務と経理業務の両方を出来る様になる事で、お互いに協力し合える体制が作れるのではないかと考えた。

### 【方法】

仮説：総務業務と経理業務の両方を各職員が経験し幅広い知識を得る事で、今まで何も出来なかった同僚に対して、協力出来る様になるのではないかと考えた。また、主業務以外でも普段からお互いに共有すれば、個人の負担が軽減されるのではないかと考えた。

対象：総務経理職員 5名

方法：①主業務担当者のローテーション制

②ホワイトボードを活用し、業務の進捗状況の共有化を図る

期間：平成 21 年 9 月から平成 25 年 9 月

### 【結果】

総務業務と経理業務をまたいでの担当者変更を数年かけて行う事により、平成 21 年 9 月ではそれぞれの業務を一人で担当していたが、現在では各主業務において 2 名の職員が担当出来るようになり、さらに管理費業務と業者支払業務については 4 名の職員が担当出来るようになった。

また、ホワイトボードを活用する事で、職員の誰もが業務の進捗状況を把握出来るようになった。その結果、業務の処理忘れや滞る事が無くなり、個人の負担も軽減された。

### 【考察】

主業務をローテーションして業務の内容を複数の職員が把握する事で、各職員の置かれている状況が分かりやすくなり、協力体制が取りやすくなる事が分かった。また、ホワイトボードとマグネットを活用するという一見単純な仕組みが、どの仕事をいつまでに誰が作業をするのかを把握するのに、大変有効である事が分かった。

### 【結論】

総務と経理で担当を分けてしまいがちだが、少人数の部署だからこそ、業務の垣根をなくす事の大切さを感じる。確かに新たな業務に携わることは大きな労力を必要とし、また混乱も生じやすいが、マニュアルや手順書を活用する事により、引き継ぎの負担を軽減させる事が出来た。

まだ、正職員並びに契約職員給与や予算実績管理を担当出来る職員がそれぞれ 2 名であり、主担当者が不可欠な業務もあるため、今後も総務業務と経理業務の両方の幅広い知識と経験を重ね、オールラウンドの職員となる事で、より良い協力体制を整えたいと思う。